

近世絵図史料論の課題

——国絵図研究会の活動を通して——

小 野 寺 淳

はじめに

I 1980年代までの地理学における古地図研究の展開

II 1990年代以降における古地図研究の進展

III 近世絵図史料論の六つの課題

おわりに

はじめに

科学研究費補助金・基盤研究（A）「地図史料学の構築」（代表：杉本史子）では、歴史学・地理学のみならず、認知研究、アーカイブ学、文化財学、模写・影写・経師技術者などが一鋪の江戸幕府撰国絵図をさまざまな視点と科学的技術を用いて研究するところに主たる目的がある。まさに学融合としての地図史料学の構築を目指すものといえよう。本科研のもう一つの目的は前近代の古地図データベース構築である。公表された図録・自治体史などに掲載された古地図をデータベース化して検索可能にすることを目指す。研究期間内に多種多様な前近代の古地図に汎用性が高い入力項目を設定し、できる限り多くの古地図を入力、前近代古地図の汎用データベースの構築を目標とする。その際、古地図を史料群として捉えて位置づけることも重要な課題としている。そこで、江戸時代の地図の中でも江戸幕府撰国絵図の情報をひとつの軸として、科研の主たる研究対象とした。江戸幕府が作成基準を示し、諸大名に作成を命じた江戸幕府撰国絵図は、清絵図、窺い絵図、際絵図、写図のほか、関連文書、正保期の城絵図、道之帳などが残され、史料群として把握することに意味があるからである。

この研究プロジェクトは、東京大学史料編纂所画像史料解析センタープロジェクト「内務省引継地図および関連史料の研究」から発展し、また「国絵図研究会」と協力体制のもとに研究活動を行っている。

歴史地理学の立場から両者にかかわり、国絵図研究会の活動に深く関わっている者として、この小論では国絵図研究会発足に至った地理学における古地図研究の歩み、ならびに国絵図研究会の活動の一端をまとめ、近世絵図史料論の課題のいくつかを示すことを目的とする。限られた紙数のなかなので十分に記述できないが、これまで以上に近世絵図の史料論が重要となった過程を、歴史地理学の立場から示しておくことは、来たるべき学融合としての地図史料学の構築のために必要な作業であろう。なお、本稿では江戸幕府撰国絵図を中心に取り上げるため、近世地図ではなく、近世絵図史料論とした。

I 1980年代までの地理学における古地図研究の展開

地理学における古地図に関する研究は大別して三つに分類することができる。第一は地図史研究（かつての地図発達史研究を含む）、第二は景観復原（復元）研究、第三は絵図解読研究（ここでは主に葛川絵図研究会の方法論を指す用語として使用）である。この三つは現在でも併存しているが、方法論の流れからいえば、地図発達史研究の枠組から離れ、古地図を主たる史料とした条里や城下町などの景観復原研究の限界のなかで、絵図解読研究へと移行したといえるであろう。もちろん、古地図研究の出発点であった地図史研究は、古地図と文化の関連とりわけ世界図から世界観を考察する観点が含まれており、単なる地図発達史ではなく、その求めるところは地理学史の解明にある¹⁾。景観復原研究は古地図を復原史料として利用する立場ではあるが、史料吟味として古地図自体の考察を含んでいる。絵図解読研究は絵図に描かれた図像の意味や描かれた空間の領域などを解釈する試みであり、過去の人々の地域

像、世界観などの空間認識の考察を目的とする。この方法論上の移行のなかで、古地図そのものを研究するにも、活用するのみであっても、詳細な原本調査の必要性が共通認識となったのは確かである。

ところで、この四半世紀の間、地理学における景観復原研究は衰退傾向にあり、むしろ歴史学や建築学などで進展している。この理由は、以下の地理学における方法論の転換にあったと考えられる。

第二次世界大戦後の1947年にアメリカ地理学会会長となったライト (J.K. Wright) は Geosophy を提唱した²⁾。やがて1971年にはプリンス (H.C. Prince) が、地理的知識の領域を実在的世界 (Real World)、主体的世界 (Imagined World)、抽象的世界 (Abstract World) の三つに区分し、特に主体的世界 (人間の主体的な空間認識) と抽象的世界 (計量的手法を導入したモデル構築) の領域を広げることの必要性を説いた³⁾。1976年にはライトの弟子であるイー・フー・トゥアン (Yi-Fu Tuan) が “Humanistic Geography” (「人文主義地理学」または「人間主義地理学」と訳された) という論文⁴⁾を著した。その後トゥアンはアナル学派の影響を受けつつ、周知のように次々に著書を著し、彼の人文主義地理学は20世紀末の地理学に大きな影響を及ぼす。古地図研究においても、*The History of Cartography* の編者の一人であり、20世紀末の古地図研究をリードしたハーリー (J.B. Harley) は「地図は人間の心の中にある精神的世界と外部の物理的世界をつなぐ仲介者である」として、図1の模式図を提示した⁵⁾。景観またはそれらを取りまく現実の環境の中から、観察と情報を得て地図が作成され、地図の利用者は地図を解釈することによって情報を得るため、図1のような循環した関係が成り立つとする。この考え方は行動科学の認知研究の影響も受けたものと推測するが、古地図のみならず、凡例によって記号化された地形図の読図においても同様といえよう。

このような欧米の地理学・古地図研究における主体的世界への関心は、日本でも水津一朗氏⁶⁾をはじめとして早くから関心を持った研究者があったが、なかんずく当時の若手地理学者に影響を与えた。1981年には吉田敏弘氏を中心として「葛川絵図」の

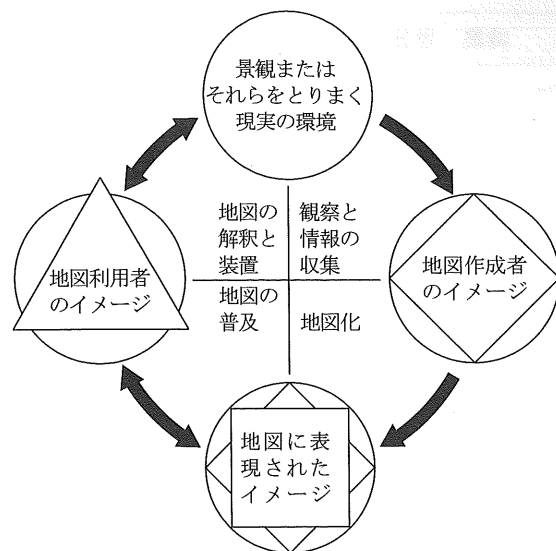


図1 絵図の作成過程とイメージ

地図の作成は、地図作成者と校正者によって収集され、修正される情報を伝達する過程である。

典拠：Harley, J.B., Ancient maps waiting to be read, *The Geographical Magazine* Feb. 1981, p.313, をもとに小野寺淳訳。小野寺「景観論と絵図研究——絵図学構築のために——」『國學院雑誌』98-3, 1997, より転載。

分析方法⁷⁾が示され、1984年度歴史地理学会大会では「空間認知の歴史地理」がテーマとされ、絵図から空間認識を解読する試みがみられた⁸⁾。絵図解読研究の成果が次々に公表され、葛川絵図研究会はこの種の研究の中心となる。1988年には『絵図のコスモロジー』上巻⁹⁾を刊行、「絵図研究の視点と方法」では三つのアプローチを提示した。第一は絵図の作成・利用過程を検証することにより絵図を歴史的コンテキストのなかで考察、第二は絵図の表現法の分析により表現された地域像を記号論的に考察、第三は絵図に描かれた空間を水津一朗氏¹⁰⁾が指摘したトポロジカルな空間としてとらえ、その世界像を解釈するアプローチである。翌年にはこの三つのアプローチによる個別研究を収録した『絵図のコスモロジー』下巻¹¹⁾を刊行した。

このように、1980年代は地理学において古地図研究の方法論上の画期であった。ただし、三好唯義氏が指摘したように、大型図版や複製図を掲載する古地図集成などの出版、専門性の高い概説本の出版、自治体史での古地図の積極的な掲載などを考えれば、地図史研究盛況の画期はすでに1970年代にあったと

もいえる。この中で三好唯義氏は「時代を問わず、地理学分野ばかりか日本史、文化交流史、美術史など、様々な学問分野からの協力を得なければならないことは自明で、一枚の地図をめぐる学際的な研究は今後ますます必要となろう」¹²⁾と記している。

II 1990年代以降における古地図研究の進展 ——国絵図研究会の活動を中心に——

『絵図のコスモロジー』刊行を機に、葛川絵図研究会では1990年度から参詣曼陀羅図、都市図など、いくつかの研究集会を立ち上げた。その一つとして「近世官撰国絵図研究」(世話役：上原秀明・小野寺淳)を発足させる。約2年間で神戸市立博物館、鳥取県立博物館、島原市立図書館、熊本県立美術館、愛知県図書館・蓬左文庫、鎮国神社(桑名市)、佐賀県立図書館・松浦史料博物館、福岡市立博物館、秋田県図書館・秋田県庁・致道博物館(鶴岡市)・米沢市立米沢図書館において、江戸幕府撰国絵図の閲覧を行った。ここでは主に①体系的な絵図史料の所在確認と写真撮影などによる資料化、②見学会を開催し、絵図の鑑識眼を磨くことを目的とした(上原秀明「国絵図研究会発足にあたって」より)。この二つの目的は、葛川絵図研究会の活動の中で方法論の構築を目指したとともに、いまだ30歳代であった我々が必要と認識した課題でもあった。当時、1980年度科学研究費「現存古地図の歴史地理学的研究」(代表：土田直鎮〔東京大学史料編纂所教授〕)の成果として「現存江戸幕府国絵図所蔵機関別一覧(稿)」が掲載されていた。この東京大学史料編纂所の研究者による丹念な成果に導かれつつ、葛川絵図研究会では前述の各地で原本調査を実施した。現地の研究者との交流などにより所在情報の教示を得、また10年の間に所蔵機関での史料整理の進展もあった結果であろう、出羽国のみでも次々と国絵図の現存を新たに確認することになる。

その後、葛川絵図研究会が解散したこともあり、1994年度に上原秀明氏と磯永和貴氏を中心となり、あらたに国絵図研究会が発足した。第1回は宇治市歴史資料館で正保山城国絵図の原本調査を行った。1984年に『江戸幕府撰国絵図の研究』¹³⁾を上梓し、国絵図研究の第一人者であった川村博忠氏を代表に

表1 国絵図研究会の活動

回	開催年度	研究会開催機関
1	1994	宇治市歴史資料館
2	1995	東京(千秋文庫, サビエンス社)
3	1995	奈良県立図書館
4	1996	徳島大学附属図書館
5	1996	亀岡市文化資料館
6	1997	山口県文書館
7	1998	米沢市立米沢図書館
8	1998	長野市立博物館
9	1999	白杵市立白杵図書館
10	2000	税務大学校租税史料館
11	2000	西宮市立郷土資料館
12	2001	伊能忠敬記念館(佐原市)
13	2001	岡山大学附属図書館
14	2002	土佐山内家宝物資料館・高知市民図書館・高知県立図書館
15	2003	滋賀県立図書館
16	2003	秋田県公文書館
17	2004	京都府立総合資料館
18	2005	茨城大学・幕末と明治の博物館
19	2006	射水市新湊博物館
20	2006	徳島大学ガレリア新蔵・附属図書館
21	2007	愛知県図書館・名古屋市蓬左文庫・徳川美術館
22	2007	山口県文書館
23	2008	大阪市歴史博物館

迎え、地理学、歴史学といった分野を問わず、また学芸員の方々や大学院生も会員に加わった。全国各地の国絵図所蔵機関のご理解をいただき、国絵図の閲覧あるいは原本調査を行い、研究発表2本を組み合わせた研究会を年2回ほど開催するようになる(表1)。ここでは、この活動を通して重要と思われる点をいくつか紹介したい。なお、所蔵機関の名称変更が行われた場合でも、本稿では当時の名称で記載することをご了解いただきたい。

1998年6月の7回研究会では、米沢市立米沢図書館(現在は米沢市上杉博物館に移管)において最大級の大型絵図である正保出羽一國絵図(二分劃)、ならびに際(縁)絵図・会形を閲覧した。この研究会で阿部俊夫氏は、国境を確定した元禄期の際(縁)絵図・会形はその後の争論を未然に防ぐ役割を持ったと述べ、国絵図が有した持続的な役割の解明の必要性を指摘した(「米沢市立図書館収蔵の会形・際絵図について」『国絵図ニュース』2号, 1998年)。この指摘を敷衍すれば、幕府は献上された国絵図、城絵図、郷帳、道之帳をいかに保管し利用したのか¹⁴⁾、一方、献上した諸大名はいかに控図

や下図を保管し利用したのか、国絵図や城絵図などの保管や利用の問題を明らかにすることの必要性を会員が認識することになる。すなわち、古地図の作成主体、作成時期、作成目的、表現内容、空間認識の解明のみならず、江戸時代における絵図の保管の意味やその利用までも研究の範囲に含めることが必要である。

1999年8月の9回研究会では、稲葉家文書を所蔵する臼杵市立臼杵図書館で国絵図調査を行う。研究会では渡部淳氏が、臼杵藩と岡藩における豊後元禄国絵図の管理体制に関して報告した（「臼杵藩元禄国絵図関係資料の管理体制について」『国絵図ニュース』6号、2000年）。当時の臼杵図書館では保存状態の良い絵図もあったが、国絵図一枚一枚の料紙が断簡となっていたものも多くあり、修復を含めた本格的な調査・整理の必要性を認識することになる。臼杵図書館に限らず、近世絵図の整理・修復を必要とする所蔵機関が多いことを、改めて認識することとなった。その後、川村博忠氏・上原秀明氏・平井義人氏らによって原本調査がなされ、修復も行われている¹⁵⁾。

このような国絵図研究会の活動が5年を経過した頃から、研究会独自で国絵図の所在情報を集約しようとの機運が高まった。2000年7月には国絵図所在調査情報リストの作成要領を決め、会員に呼びかけて本格的な所在調査を実施していく。この成果は2005年刊行の『国絵図の世界』¹⁶⁾所収の「国絵図所在一覧」に掲載し、その総数は1500点にのぼる。会員の地道な調査の成果であるが、刊行当時からいまだ未調査の所蔵機関があったこともあり、不完全であることは十分に認識していた。現在でも少しずつ新たに国絵図の所在が確認されており、所在調査は続行中というほかない。

2002年11月の14回研究会では土佐山内家宝物資料館と高知市民図書館で国絵図を閲覧した。なかでも高知市民図書館所蔵の元禄土佐国絵図に関心が向けられた。通常、長方形の料紙が接合されて一つの絵図が作られるが、この国絵図は料紙を切張りして接合している。この理由をめぐるさまざまな意見が交わされたが、結局わからずじまいであった。その後、2006年度に本科研で再調査し、その成果の一部

は杉本史子論文に記載されているので、参照されたい。

2003年3月の15回研究会は滋賀県立図書館で開催され、正保・元禄・天保に加え、明治期の国絵図を閲覧することができた。明治期の国絵図については、阿部俊夫氏¹⁷⁾、藤本清二郎氏¹⁸⁾の研究といまだ少なく、これを契機に、磯永和貴氏（「明治政府撰国絵図の編纂事業—丹波国を中心に—」『国絵図ニュース』12号、2002年）、小田匡保氏（「明治初期作製の大和国絵図について」同14号、2003年）、野積正吉氏（『富山史壇』141号、2003年）の報告が生まれている。

2003年8月の16回研究会は秋田県公文書館で実施し、出羽国の大型国絵図を閲覧させていただいた¹⁹⁾。江戸幕府撰国絵図は大型のため、個人での閲覧が困難な場合が多い。研究会として閲覧を申請し、所蔵機関の厚意により、大型絵図を閲覧する機会を得ている。ときには個人では所蔵の有無も知りえない絵図や閲覧が叶わない絵図も、研究会として閲覧が可能になったこともある。研究会会員は80名ほどであり、常に20～30名程度の会員が参加している。

国絵図研究会は2005年に『国絵図の世界』を刊行した。これを機に、国絵図研究会の名称は残し、対象とする古地図は近世絵図全般に広げている。

Ⅲ 近世絵図史料論の六つの課題

四半世紀の間に、博物館の展示、自治体史の編纂において、古地図は必要不可欠な歴史史料となり、文献の補助史料から完全に脱皮し、市民権を得た。荘園絵図、洛中洛外図や絵巻などに関する数々の優れた研究成果が、大きく寄与したことはいうまでもない。こうした進展のなかで、近世・近代の多種多様な地図にも光が当たるようになった。ここでは、国絵図研究会の活動を通して明らかになった近世絵図史料論の構築に必要な課題を六つ提示しておきたい。その一つは原本の科学的分析の必要性である。これは、本誌6月号（特集Ⅰ）の杉本史子論文ほかで詳述されている。もう一つは、川村博忠氏の研究²⁰⁾を踏まえ、絵図師とその測量技術と絵図の作図の研究である。測量技術などは本号の鳴海邦臣論文で扱われている。ここでは、この2点を省略し、

（1）古地図の体系化と所在データベースの構築、（2）高精細デジタル画像の提供と分析ツールとしてのGIS（地理情報システム）、（3）絵図の保管と利用に関する研究、（4）写図と写す行為の研究、について取り上げる。

1 古地図の体系化と所在データベースの構築

現在では、たまたま見出された古地図のみで研究する段階は完全に終わった。徹底した所在調査に基づき、厳密な史料吟味を経た古地図研究でなければ、もはや通用しない。このため、古地図を研究・活用する者にとって、古地図の所在データベースは必要不可欠となりつつある。研究・利用者の利便性はもちろんのこと、データベース化は所蔵機関においても必要とされる。所蔵機関では古地図を専門とする学芸員や研究者は少なく、古地図目録の作成が最もむずかしいとの声を耳にする。この理由の一つは、作成年や作成者不明の古地図が多く、またデータベースにする際に、いかなる古地図の様式や表現内容を項目にすると有用な検索機能をもつかが十分に議論されていないためである。この点に密接に関わるのが、古地図の分類である。近年の例のみでも、荘園絵図に関する吉田敏弘氏²¹⁾、南出眞助氏²²⁾、近世地方絵図に関する川村博忠氏²³⁾、刊行図を含めた分類を示した山下和正氏²⁴⁾、機能と表現対象から分類した金田章裕氏²⁵⁾など、試案が示されている。いずれも優れた分類法ではあるが、多種多様な古地図に遭遇すると、どこに分類すべきか迷う経験をするのも少なくない。古地図の分類は元来便宜的なものと考えれば良いが、多種多様な古地図のデータが蓄積されてくると、古地図の体系化をさらに思考する必要が生じるであろう。

古地図のデータベースは、所在を中心にしたデータベース²⁶⁾と、特定の古地図の図像をデータベース化したもの²⁷⁾に大別できる。いずれも取り上げる項目も作成者や所蔵機関で異なり、標準化されたものがあるわけではない。特に前者の所在データベースは互換性の点からも標準化が急がれる。近年ではWeb上で国内外の古地図に関する情報が溢れている。古地図に関する出版物、博物館展示情報など貴重な情報が常に発信されており、歴史地理メーリン

グリストでは小田匡保氏らによって情報の共有化が行われている。今後ますます必要な古地図に関する情報を、Web上で検索していくことが容易になるであろう。問題は、すでに刊行物に掲載された古地図に関する情報であり、所在データベースに最小限必要な項目を決定しておかなければならない。

2 高精細デジタル画像の提供と分析ツールとしてのGIS

かつて歴史学では木村礎氏が生活の場である村の景観を重視し、村絵図や地籍図のトレース図の作成を推進された²⁸⁾。地理学では古代・中世の条里復元を行う上で地籍図が重要となり、佐藤甚次郎氏²⁹⁾は明治期作成の地籍図に関する体系的な研究成果を上梓した。1980年代になると荘園絵図や村絵図の手書きのトレース図が盛んに作成される。大型コピー機種の登場もトレース図作成を容易にした。一方、博物館などでは図録に写真を掲載するために古地図を撮影することが多くなった。写真版はトレース図の作成を容易にした一番大きな理由であったろう。近年ではパソコンの性能の向上、ソフトの充実、デジタルカメラの画素数の向上によって、従来職人芸的に行っていたトレース図作成や歪みの分析を行うメッシュ法などを効率的に行うことが可能になった。一方、古地図の保存と利用に課題を抱えている所蔵機関も多い。保存の観点から、古地図を頻繁に広げることによる傷みが危惧される。また大型古地図は収蔵庫からの出し入れに手間取ること、古地図の閲覧に慣れない利用者のために学芸員の立ち会いが必要などの問題点がある。このように文書資料とは異なる対応を迫られる古地図を、いかに保存して利用者に提供できるかの対策は、多くの所蔵機関が抱える問題点である。

このような古地図の保存と研究利用が抱える課題を解決するため、一つは古地図をデジタル高精細画像にして閲覧提供する方法がある。国絵図のような大型古地図の高精細画像化には、できる限り鮮明に撮影することが要求される。1991年には国立歴史民俗博物館³⁰⁾で画像データベースシステムの研究が行われた。1997年度には徳島大学附属図書館で伊能図や阿波国絵図をデジタル化して公開した。現在では

博物館・図書館などのホームページでは、古地図の画像の公開が増加している。

さらに、もう一つはこうした高精細古地図画像データの画像処理やGISソフトを用いた古地図解析法も注目される。清水英範氏の古地図の幾何補正の研究³¹⁾をはじめ、平井松午氏の近世絵図の三次元表示³²⁾など、近世絵図の加工・分析ツールとしてもGISの利用が活発化しつつある。GISは計測も可能なデジタル地図解析ツールであり、古地図分析にも、その有効性が認識されつつある。GISは世界共通の市販ソフトであり、廉価になったことも普及を加速する可能性が高い。

3 絵図の保管と利用に関する研究

古典的な古地図研究は、いつ、だれが、何のために地図を作成したかの研究であった。これは現在でも必要不可欠な課題である。これに加えて、作成された絵図はいかに利用され、いかに保存されたかを解明する必要がある。これについては裁許絵図の研究が先行しているが、前述したように江戸幕府における国絵図の利用については磯永和貴氏、大名の国絵図保管については渡部淳氏の研究などがみられる。しかし、国絵図に限らず、幕府や諸大名の絵図管理や利用については不明な点がいまだ多い。こうしたなかで、最近では米沢藩の城下絵図の変質を武家地管理の変化と関連づけて明らかにした渡辺理絵氏の研究³³⁾が注目される。こうした観点からの研究は、絵図群としての近世絵図の把握とともに、さらなる事例研究を生み出すであろう。

もちろん、古地図の保管と利用は幕府や諸大名に限ったことではない。地方文書に含まれる古地図でも同様である。また、保管されていた絵図を当初の作成目的ではないことで再利用される場合がしばしばあった。たとえば、河川絵図を研究した小野寺淳は、筑後川絵図が河口の魚場争論に利用された例などを示したことがある³⁴⁾。

4 写図と写す行為の研究

現存する近世絵図を大別すると、完成図（ここでは献上図・控図を指す）のほか、下図と写図（写本）に分けることができる。訴訟関係の絵図であれ

ば、訴える側、訴えられた側、裁決する側の三者が通常は保管したので、完成図といえども複数現存する可能性を想定しなければならない。近世絵図の場合、幕府や藩旧蔵の献上図も一部は現存するが、自治体史編纂の過程で見出された絵図を含めれば、現存する絵図の多くは完成図よりもむしろ下図や写図である。完成図と下図がともに現存すればよいが、このような例は例外である。このため、研究では下図や写図を史料とせざるを得ない場合が多い。

一口に下図といっても、デッサン図から完成一手前まで、数段階の下図があるのが一般的である。また当然ながら、下図には作成途中のための脱落や誤謬があると疑ってかからなければならない。写図もまた、完成図を正確に写し取ったと考えられる絵図もあれば、図形をかなり変形して小型の写図に仕上げた絵図もある。写し取るという行為には、写図を作成するための目的が内在している。このため、原本の作成目的とは異なる目的で写し取られ、簡略化され、不必要と判断された図像や凡例は無視される傾向がある。したがって、研究対象とする絵図が完成図であるか否か、下図ならばどの段階の絵図か、写図ならば原本はいつ作成されたものかなど、絵図の史料吟味が研究上きわめて重要である。

しかし、下図や写図は必ずしも史料的価値が劣るとはいえない。景観復原研究における下図の史料的価値は相対的に完成図よりも低いが、絵図解読研究の面からは興味深い研究対象となりうる。下図の中には完成図にはない現実の景観が表現されている例もあり、何よりも絵図の作成過程を把握することが可能となる。写図には写し取った人間の空間認識や世界観が反映されることが多く、いかなる目的で写図を作る必要があったかは、重要な研究課題となりうる。また、写図が多く現存するという現実、前述のように絵図は再利用されるものという絵図の一つの性格を示唆する。

さらに写し取る行為そのものを研究する必要がある。たとえば、江戸幕府撰国絵図とは異なるが、正保常陸国絵図の約4分の1の縮写図が手書き彩色で写し取られ、管見でも10数点もの江戸後期の写図が現存する（小野寺淳「正保常陸国絵図を写す人々」『国絵図ニュース』17号、2006年）。数多く現存する

近世絵図の写図、この写す行為の解明は近世社会の政治的・経済的・文化的特質と密接な関わりがあるであろう。最近では上杉和央氏³⁵⁾が渡辺吉賢の地図収集ネットワークを考察しており、関連する研究成果である。

おわりに

1980年代、日本の地理学界では人文主義地理学が導入され、この新たな方法論は古地図研究にも影響を与えた。また、研究史料としての古地図への注目が高まるなかで、葛川絵図研究会の会員らによって絵図を解読する方法論の構築が目指された。その成果の一つが『絵図のコスモロジー』上・下巻の刊行であった。葛川絵図研究会での経験を踏まえて、さらに詳細な原本調査の必要性が認識されるとともに、江戸時代の地図編纂の解明に欠かすことのできない江戸幕府撰国絵図に注目し、1994年には新たに国絵図研究会が組織された。江戸幕府の国絵図編纂事業と、これによって生み出され、全国各地に残る国絵図群は、詳細な原本調査なくしては解明できない、日本の古地図研究の幹のような史料である。川村博忠氏の指導に導かれつつ、次々に存在が確認されていく大型の国絵図群の原本調査を続け、国絵図研究会の総力をあげて刊行したのが『国絵図の世界』であった。国絵図研究会は、国絵図に関心を持つ人ならば分野も年齢も問わず、オープンな組織である。この小論では、近世絵図史料論の構築に向けて、国絵図研究会の活動を通して得た六つの課題を提示した。①原本への科学的分析の導入、②絵図師とその測量術と作図の事例蓄積、③古地図の体系化と所在データベースの構築、④高精細デジタル画像の提供と分析ツールとしてのGIS、⑤絵図の保管と利用に関する研究、⑥写図と写す行為の研究、である。もちろん、近世絵図史料論の構築には、六つの課題で済むと思っているわけではない。これまで百数十箇所の所蔵機関ならびに個人所蔵宅で江戸時代に作成された手書きの絵図の原本調査を行ったが、いまだ氷山の一角と認識させられるほど、江戸時代の地図文化が形成された時代であったといえよう。

- 1) 地図史研究においても、海野一隆氏の『東西地図文化交渉史研究』、『東洋地理学史研究一大陸篇』、『東洋地理学史研究一日本篇』（2003、2004、2005年。いずれも清文堂）の3部作が刊行された。
- 2) J.K. Wright, *Terrae Incognitae: the Place of Imagination in Geography, Annals of the Association of American Geographers*, Vol.37, 1947, 1-15.
- 3) H.C. Prince, "Real, imagined and abstaract world of the past," *Progress in Geography*, Vol. 3, 1971, pp.4-86.
- 4) Tuan Yi-Fu, *Humanistic Geography, Annals of the Association of American Geographers*, Vol.66, 1976, 266-276.
- 5) J.B. Harley, "The Map and the Development of the History of Cartography," J.B. Harley and D. Woodward (eds.), *The History of Cartography*, Vol.1. Chicago, The University of Chicago Press, 1987.
- 6) 水津一朗「未開人の地図」『日本史研究』7, 1948年, 42-55頁。
- 7) 葛川絵図研究会「「葛川絵図」にみる空間認識とその表現」『日本史研究』244, 1982年。
- 8) 『歴史地理学紀要27 空間認知の歴史地理』歴史地理学会, 1985年。
- 9) 葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』上巻, 地人書房, 1988年。
- 10) 水津一朗『景観の深層』地人書房, 1987年, 302頁。
- 11) 葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻, 地人書房, 1999年。
- 12) 三好唯義「(学界展望) 地図史—日本を中心に—」『人文地理』58-3, 2006年, 66-71頁。
- 13) 川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』古今書院, 1984年, 534頁。
- 14) 磯永和貴「紅葉山文庫収蔵『献上国絵図』の管理と利用」『佛教大学史学論集—史学科創設三十周年記念—』1999年, 127-139頁。
- 15) 『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』臼杵市教育委員会, 2005年。
- 16) 国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房, 2005年。
- 17) 阿部俊夫「明治の国絵図(1)(2)(3)」、『文化福島』331・332・333, 1997年。
- 18) 藤本清二郎「明治2年頃「和歌山藩領絵図」について」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』21, 2001年, 1-12頁。
- 19) 2001・2003年度、国絵図研究会『江戸幕府撰国絵図の画像データベース研究』（正保編, 元禄・天保編）,

唐王朝と古代日本

榎本淳一著

古代日本に中国文化はどのように流入したのか。対外方針と「渡海制」・唐代の出入国管理制度・漢籍将来などから外交関係の解明。唐代朝貢体制を基軸に日唐外交を捉え直し、文化流入の実態と遣唐使停止後の日本文化の変容を考察。**10500円**

律令官人制と地域社会

中村順昭著 官人制の基礎となる中央の諸官司と地方の下級官人・官人身分をもたない人々が、平城京や地域社会において、いかに機能したかを論究。官人制を通して古代社会の実像を明らかにする。**11550円**

幕末維新期の社会変革と群像

田中正弘著 社会の変革期、人びとはどう行動したのか。大目付や町奉行に仕官した元農民、在地名望家の情報収集と肖像画制作をめぐる文化交流、武器購入問題、旧幕臣による大名屋敷の開墾、土族の排外事件などから時代像を読み描く。**11550円**

継体天皇の時代

徹底討論
今城塚古墳

高槻市教育委員会編 継体天皇の墓とされる今城塚古墳は現在唯一市民の立ち入りが許された天皇陵である。大量の埴輪、新王統か否かの議論、日朝関係、阿蘇ビシク石製の棺三つの棺に埋葬された人物などに迫り、その姿を明らかにする。**2730円**

モノと男の戦後史

石谷二郎著
天野正子

戦後、日本の社会は大きく変貌し、男をとりまく環境も変った。居場所「喫茶店・書斎・墓」、身体「カツラ・パイアグラ・ランチ」、表象「スーツ・社章」など「男であること」を生み出してきたモノを通して描くもうひとつの戦後史。**2940円**

大飢饉、室町社会を襲う！

清水克行著

慢性的な飢饉に直面していた室町人。そこに巨大飢饉が襲いかかったとき人々はどうしたのか。飢饉と飽食の残酷な構造をうかがう。各**1785円**

259 検証島原天草一揆

大橋幸泰著

幕府を震撼させたキリシタンの武力蜂起「島原天草一揆」。経済闘争か、宗教戦争か、その問いに問題はないのか。一揆の歴史的意義を探索。

吉川弘文館

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-2-8
電話 03-3813-9151(代表)

2008年版『出版図書目録』送呈
FAX 03-3812-3544 / 価格は5%税込です
[URL] <http://www.yoshikawa-k.co.jp/>

古代東アジアの情報伝達

藤田勝久・松原弘宣編

出土文字資料は、発信から廃棄まで全ての経緯の痕跡を留めている。気鋭の中国・日本史研究者が、新たな「資料論」の構築をめざす。

中国篇…藤田勝久・陳 偉・藤田高夫・關尾史郎・角谷常子・東 賢司
日本篇…松原弘宣・小林昌二・市 大樹・大平 聡・加藤友康・前沢和之

中国古代の律令と社会

池田雄一著

〔総論〕中国古代の法典編纂〔Ⅰ先秦時代の法制〕〔Ⅱ秦漢時代の法制〕〔Ⅲ中国古代の出土文物と地域社会〕〔索引〕**A5判 15750円**

先秦家族關係史料の新研究

小寺 敦著

〔序章〕先秦家族關係史料に関する研究史の整理と展望〔第一章〕春秋三傳にみえる婚姻記事の比較検討〔第二章〕先秦時代系譜關係史料の検討〔第三章〕「左傳」引詩の研究 **A5判 11550円**

中国古代国家の形成と青銅兵器

下田 誠著

〔序章〕中国古代国家形成史論と青銅兵器研究〔韓国兵器の基礎的考察〕〔戦国韓国の権力構造〕〔趙国兵器の基礎的考察〕〔魏国兵器の基礎的考察〕〔戦国三晋諸国の領域形成と二県制〕ほか **A5判 7875円**

漢代の地方官吏と地域社会

高村武幸著

〔第一部〕漢代官吏の資格について〔第二部〕漢代官吏の社会と生活〔第三部〕秦漢時代の地方行政をめぐる諸問題〔第四部〕前漢辺境地域社会の形成と特質 **A5判 13650円**

近世実録の研究 ―成長と展開―

菊池庸介著

附「主要実録書名二覽稿」 実録の転化成長に注目し、史書には表れない江戸文化を考察する。「翻刻篇」に「賊禁秘談」「大岡秘事」を収録。 **A5判 15750円**

佐佐木高行家旧蔵書目録

國學院大學編

佐佐木高行の旧蔵書を中心とする佐佐木家三代(高行・高美・行忠)の蔵書目録。高行が所持した公文書類など幕末から明治期の貴重な資料が含まれる。 **318頁・9450円**
限定販売250部

の研究開発 (HISPIC システム) 国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告 第30集 歴史研究支援情報処理の研究—画像データを中心に—』、1991年、341-363頁。

- 31) 清水英範「古地図の幾何補正に関する研究」『土木学会論文集』625、1999年。清水英範・布施孝志「国土の原景観を探索」『測量』10、2003年。対馬国絵図と人口衛星MOSのMESSRデータの面積・海岸線をデジタル画像上で重ね合わせた研究が試みられている。須藤恵之輔・全炳徳・長野克章「対馬国絵図の資料調査と画像解析」『土木史研究』16、1996年、375-380頁。
- 32) 平井松午「伊能図のデジタル化と絵図のGIS分析—徳島大学の試み—」『地図』41-4、19-20頁。
- 33) 渡辺理絵「城下町絵図の様式変化と武家地管理の展開—米沢藩を例にして—」『人文地理』55-3、2003年、1-23頁(のち、同『近世武家地の住民と屋敷管理』大阪大学出版会、2008年に所収)。
- 34) 小野寺淳『近世河川絵図の研究』古今書院、1991年、247-250頁。
- 35) 上杉和央「18世紀における地図収集のネットワーク—大坂天満宮祝部渡辺吉賢を中心に—」『地理学評論』80-13、2007年、823-841頁。

* 本論文は、2006～2009年度・科学研究費補助金・基盤研究(A)「地図史料学の構築—前近代地図データ集積・公開のために—」(代表・杉本史子、課題番号18202015)の成果の一部である。

18202015)の研究成果の一部である。

* 本稿の一部は、2007年7月に開催された科研「地図史料学の構築」における2007年度公開研究集会「歴史のなかの地図Ⅱ 地図—知の交差点」で報告した。また、研究の遂行にあたっては、平成18・19年度科学研究費補助金(若手(B))「日本近世の農村社会における土地測量の普及過程とその近代地籍測量への影響」(代表:鳴海邦匡)の一部を使用した。

それぞれ10巻入りのCD-ROMを作成した。出羽国は大型の国絵図が多く、小野寺淳は2メートルの鉄パイプを櫓に組み立て、その上から大型絵図を撮影し、これを高精細のデジタル画像にした。

- 20) 川村博忠『近世絵図と測量術』古今書院、1992年。
- 21) 吉田敏弘「荘園絵図の分類をめぐる」『企画展示 荘園絵図とその世界』国立歴史民俗博物館、1993年。
- 22) 南出眞助「古代荘園図と中世荘園絵図」金田章裕ほか編『日本古代荘園図』東京大学出版会、1996年、151-170頁。
- 23) 川村、前掲『近世絵図と測量術』、36-54頁。
- 24) 山下和正『地図で読む江戸時代』柏書房、1998年、24-25頁。
- 25) 金田章裕「絵図・地図と歴史学」『岩波講座 日本通史 別巻3 史料論』岩波書店、1995年、307-325頁。
- 26) 東京大学史料編纂所では1997年度から「絵図所在アンケート集計」(科学研究費「日本史近世における社会情報と政治文化—絵図史料を中心として—」研究代表:黒田日出男)を公表している。
- 27) 出田和久・正木久仁「古地図に描かれた内容のデータベース化のためのシステム構築」重点領域研究『人文科学とコンピュータ』科研報告書、1996年、69-78頁。
- 28) 木村礎『村落景観の史的研究』八木書店、1988年、599頁、など。
- 29) 佐藤甚次郎『明治期作成の地籍図』古今書院、1986年、482頁。
- 30) 八重樫純樹・倉田は「画像データベースシステム

(24頁より続く)

- 34) ①鳴海邦匡「近世の大阪の地図に関するノート」『待兼山論叢』40号(日本学篇)、2006、24-26頁。②泉佐野市史編さん委員会編『新修泉佐野市史13 絵図地図編(絵図集)』泉佐野市、1999、32-35頁。鳴海『近世日本の地図と測量』123-126頁。

* 本論文は、2006～2009年度・科学研究費補助金・基盤研究(A)「地図史料学の構築—前近代地図データ集積・公開のために—」(代表・杉本史子、課題番号

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4
TEL03-3265-9764 FAX03-3222-1845

汲古書院

価格は税込です
E-mail:kyuko@fancy.ocn.ne.jp